



生活やものづくりの学びNetニュース

巻頭言 北欧に於ける『徒弟的修行』を通じた職業教育・訓練の導入
ネットワーク副代表/大東文化大学文学部 沼口 博

ご承知のことかもしれないが、北欧諸国では 1990 年代に入ってから「徒弟的修行」(アパレンティスシップ)が職業教育・訓練の中に積極的に導入されるようになってきた。北欧諸国の中でも一番「徒弟的修行」には否定的だった(労働組合運動との関係で)スウェーデンでもドイツ的なデュアル・システムと呼ばれてきた職業教育・訓練が一部の地域で試行されるようになってきた。2 年ほど前にスウェーデンのヨーテボリとウデバラの職業高校生が職業現場で生き生きと目を輝かせて仕事に励んでいる様子を目にしたとき、実際の職業現場が持つ訓育的な役割は物凄いものだ実感した。ウデバラではホテルと自動車整備工場、市民生協の購買センターで「徒弟的修行」に励んでいた生徒にインタビューした。ホテルで修業していた女子生徒は、目を輝かせながら、ここ(ホテル)では、実際にお客様へのニーズに対応したサービスが求められ、お客からの反応が直接得られるので、学校内での実習よりすごくためになるし、予約の受付、ホテルのルームのベッドメイキングや清掃、レストランの厨房での準備、会議などのレセプションの準備などホテルの仕事全体を丸ごと経験できて、本当に楽しいし、遣り甲斐があると話をしてくれた。そのホテルの支配人(徒弟的修行も担当)が同席していて、卒業後に就職する希望があるのならば採用したいと、その女子高校生を高く評価していた。また自動車販売・整備会社で「徒弟的修行」をしていた男子高校生は、車の会社によって、整備の方法が異なっていて(この自動車会社ではフォードとボルボなど、異なる自動車会社の車を取り扱っていた)それが面白いと話してくれた。一人の指導者(親方に当たる)がその生徒に丁寧に対応していた。

スウェーデンではこうした「徒弟的修行」はあくまで職業高校の生徒として学校外の職場に派遣されているので、修行中に何か起きた場合は高校生として学校が対応するということがあった。そのために高校には相談役としてのコーディネーターが配置されており、修行に問題がある場合は、このコーディネーター、職業教育担当の教師、心理カウンセラー、保健師、学級担任などがチームを作って毎日対応しているということであった。先生方は毎日大変ですと話を聞いたら、大変だけど、成長していく過程を見ることがあるので苦痛ではないという返事を貰った。

一方、ノルウェーでは 2+2 と言って、高校の最初の 2 年間は学校で職業教育を受け、後の 2 年間は職業現場で「徒

弟的修行」を行うことになっている。後半の 2 年、職場での訓練に入ったら学校は全く関係なく、職場がすべて責任を持つことになっているということであった。従って「修行中」ではあるものの、手当が支払われることになっていた(スウェーデンの場合は手当は原則ゼロ、但し近年、試行的に手当が支払われるケースが出てきたという)。修行最初の半年は通常の労働者の給与の 30%、後半は 40%、修行 2 年目の前半は 50%、後半は 75%が支払われているということだった。建築関係労働者の場合、一月に 40 万円ほどの給与が支払われるということなので、修行生は 12 万円、16 万円、20 万円、そして修行 2 年目の後半には 30 万円が手当として受け取れるということになる。ノルウェーの場合はトレーニング・センターという名前で仲介者(コーディネーター)が修行中の生徒と会社の間に入って調整を行っていた。訓練の場所に問題がある場合は別の訓練場所を紹介したり、修行中の生徒に問題がある場合は生徒を指導するなどの対応を取っているということであった。実際に手当が支払われることで、修行にも熱が入り、真剣に取り組んでいた。また、徒弟的修行を引き受ける企業・会社は新しい社員を募集しているところが多く、指導も熱心であり、また丁寧で、修行の成績が良い場合には、そのまま採用することも多いということであった。ノルウェーの場合、徒弟的修行の最終段階に職業資格取得試験が行われることになっている。昨年度見学した建築労働の場合、約 3 日間続く試験があり、提起された課題について設計図から書き起こして、段取りを組み、工程ごとに作り上げていく過程を、試験委員(建築関係者)が毎日チェックして評価することになっていた。

わが国の若者の非正規雇用率が 34.9% (20 歳から 24 歳の男子、女子の場合は 41.2%、2016 年度)にも昇っていることを考えると、日本版デュアル・システムが 2000 年ころから導入されているとはいえ、北欧のケースと比べると、圧倒的に修行時間数が足りない上に、手当なども基本的には支払われない。職業能力を育成することは若者に対する社会保障の大きな課題だと思われる。「徒弟的修行」をわが国に導入するためには企業側(労働組合も含め)と学校側の一層の歩み寄りが求められている。また、第 3 者としてのコーディネーターの役割も重要である。若者が職業能力を身に付けることは社会生活を送る上での保障につながるものと思われる。

報告 生活やものづくりの学びネットワーク 「春の学習交流会」報告

日時：2018年3月24日（土）13：30～16：00

場所：東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター

参加者：28名（小・中・高校・大学の教員、企業の方等）

<講演会>テーマ「現代っ子不器用の証明」

講師：谷田貝 公昭氏（NPO 法人子どもの生活科学研究会
代表、目白大学名誉教授）

<情報交換会>日頃の活動や授業実践等について情報交換

春の学習交流会が、東京実行委員会との共催で開催されました。講演会では、「生活やものづくりの学びネットワーク」2012年2月版の冊子において、子どもたちの生活技術力低下のデータとして引用されている谷田貝公昭氏をお招きして、「現代っ子不器用の証明」についてご講演いただきました。



<講演会>概要

はじめに、谷田貝氏が自己紹介として、これまでの調査研究の手法について話された。基本的な生活習慣の標準年齢を調べる

ために、一つひとつ実際に子どもたちに実演してもらい、45年間実技調査を続けてたくさんの子どもの姿をみて来られたとのことだった。

まず、「Iなぜ、器用さか」について、手は第二の脳と言われるが、手と頭は直結して「器用な手」→「知能が高い」は、科学的に証明されていると脳生理学から説明された。そして、「指合わせ」をすると脳が活性化すると、参加者全員で指合わせの体操を実践した。その他、脳を活性化するおもちゃとしては「LEGO」が良いこと、さらに、「料理」が脳の活性化に大変良いことが紹介された。

次に、「II器用さの実態」について、「1箸をつかう」「2生卵を割る」「3食器を並べる」「4ハサミを使う」「5包丁を使う」「6りんごの皮をむく」「7鉛筆を削る」「8缶詰を開ける」「9鉛筆の持ち方」「10ボタンをかける」「11ひもを結ぶ」「12針に意図を通す」「13顔を洗う」といった手さばきの実態について、具体的に例を挙げながらお話しされた。たとえば、小学校家庭科で卵を扱うが、子どもたちが生卵を割れないため、修学旅行で生卵は出せない、りんごの皮む

きは、予備調査の段階で、包丁で手を切って親に謝り、予備調査の段階であきらめざるを得ない、缶詰を開けるのに、どこから開けてよいか分からず、横から開けたなど、現在の子どもたちの不器用さが目に浮かぶようだった。

そして、最後に「III器用さ復活のために」では、子どもたちを家事に引き込むことを推奨された。現在の子どもたちは、直接体験（遊び、仕事、野外体験）が減り、間接体験（勉強、学習塾、ゲーム、TV視聴など）が増えていることを示され、子どもは直接体験を通して成長していく、やってみて初めてわかる知識がある、体験的知識と間接的知識が両輪になって効果があると説明された。安全教育も危険から逃げて避ける消極的安全教育ではなく、危険に挑戦することによって安全に気をつけるようになる積極的姿勢が人類の発展に繋がった。

質疑応答では、3名の参加者から質問があり、丁寧に答えられた。

<情報交換会>概要

最初に、東京実行委員会の亀井佑子氏から、東京実行委員会が地域の子どもたち対象に実践されている「ものづくり体験」の様子や作成した小物などの紹介があった。その後、参加者が3グループに分かれ、情報交換を行い、最後に各グループで話し合ったことを全体に発表した。



参加者の感想から

<講演会>

○具体的な調査に基づいた話で、わかりやすくとても楽しい講演でした。○いかに手を使って作業をすることが脳の活性化に繋がるかがよくわかりました。○人間は、直接体験を通して発展するということや子どもを家事に引きずりこむことが大事であることを再認識できました。

<情報交換会>

○様々な職種の意見、考え方をお聞きできて大変良かった。○中・高・大学までの技術能力の話や家庭科のカリキュラムの問題点がピックアップされて良かった。

（文責：野中 美津枝）

2017 年度各地区の活動報告

1. 山形県の活動報告

ネットワーク山形では 2 回の教員対象研修会を実施しました。

<第 1 回研修会>

1. 日時 4月2日(日) 13:00~16:00
2. 内容 (1) 講話「今、被服製作で身に付けさせたい基礎・基本とは」 講師 山形大学名誉教授 高木直氏、(2) 製作実習 ①小学校教員対象(ナップザック製作を通して、縫物の基礎を確認する、②中学校・高等学校教員対象
○被服製作題材の検討、○小物製作(箸入れ・ソーイングケース・ペンポーチなど)

参加者は小学校教員 3 名、中学校教員 1 名、高校教員 2 名、大学教員 3 名、高校生 2 名、大学生 1 名の計 12 名でした。メーリングリストで配信された案内をご覧になって埼玉県の小学校の先生が参加くださいました。わざわざ県外から参加された熱心な方がいらっしゃることに地元参加の皆さんも触発されたように思います。また、高校家庭科の先生が小学校の先生をなさっている娘さんを伴い、親子二代で参加してくださいました。娘さんは以前から製作実習が苦手とおっしゃっていたそうです。今後、苦手意識を持っている小学校の先生方のサポートをしていく必要があると実感したところです。高校生は参加された親御さんについてきた方たちです。時間内にテッシュペーパーケースをいくつも作って満足気に帰って行かれました。製作実習の授業について「生徒と教師に、生徒同士に穏やかな時間が流れるから好きだ」とおっしゃる先生が少なくありません。この研修会も楽しんで作る、楽しい時間を共有できる良い研修となりました。

2. 福島県の活動報告

ネットワーク福島では、これまで主に家庭科学習前の小学生を対象に、家庭科への関心を高めることや家庭での実践の機会を増やすためにおやつ作り等のクッキングを行ってきた。今年度は子どもたちの生活が乱れてきていることに着目し、子ども自身が日常の生活の在り方を見つめ直し、改善策を考えられるような学習会を実施することとした。

テーマは「毎日の生活を見直そう」で、講師は大学生とし、彼らに内容を考案してもらった。その結果、「睡眠」、「朝食」、「ブルーライト等メディア機器の使用」に関する 3 つ



「こむこむ」での学習会の様子

の点から生活を見直す学習会を行うことになった。1 回目は、県内の小学校で 1 時間(45 分)の時間を提供していただき、6 年生 44 名を対

<第 2 回研修会>

1. 日時 12月23日(土) 13:00~16:00
2. 内容 (1) 模擬授業と研究会①「私たちの行動が未来をつくる～めざせ!消費者市民～」授業者 米沢東高校 教諭 我妻典子氏 (2) ポスター発表(学部生卒論中間発表)
(3) 模擬授業と研究会②「ライフデザインとお金～将来について考えてみよう～」授業者 山形商業高校 教諭 大竹恵里氏

参加者は大学生 10 名、中学校教員 1 名、高校教員 5 名、大学教員 3 名の計 19 名でした。ベテランの先生お二人に模擬授業をしていただきました。新学習指導要領では中学校の学習内容に「クレジットカードなどの三者間契約」が、小学校に「買い物の仕組みや消費者の役割」が加わりました。この学習領域でも、小・中・高の学習内容の連携が一層求められています。今回は模擬授業後の質疑応答が白熱し、中学校と高校の先生方で充実した情報交換ができました。参加した教員志望の学生にとっては、学び続ける教師の姿を見ることが大きな刺激となったようです。

卒論の中間発表を兼ねたポスターセッションでは、参加者との質疑応答が行われました。学生にご助言・ご指導くださった先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今後も学校種を超えた研修会を企画し、情報交換や親睦をはかりながらネットワークを広げていきたいと思っています。



(文責 山形大 石垣和恵)

象に前記の 3 つの内容について、学生 3 人が 15 分ずつ子どもとの対話を取り入れながらプレゼンを行った(4/27 実施)。

その後、例年、本ネットワーク福島で使用させていただいている「こむこむ」(子どもの夢を育む施設)でも同様の学習会を行うこととし、応募してくれた小学生 4 名(4~6 年)を対象に 2 回目を実施した(11/18 実施。写真参照)。

これまで、「こむこむ」でのクッキングのワークショップには多数の応募がみられたが、今回のような学習会では、お土産付き(手作りかぼちゃクッキー)にしたものの応募者は 4 名にすぎなかった。しかし、1 回目に比べると個別に丁寧に実施できたという利点もあった。なお、今年度は活動の企画や実施を大学生(教員になる者、食関係の仕事に就く者)中心に行ったが、このような取り組みも意義深いと思われた。

(文責 浜島京子)

3. 岩手県の活動報告

岩手県の面積は四国に匹敵するほどの広域であり、各地域で様々な特産物や郷土料理が存在する。しかし、ライフスタイルの変容はもとより、東日本大震災の影響で食文化の継承に支障が出ているとの指摘もある。

そこで、岩手県支部では岩手県における食育・食文化の継承に関する教材化を検討するべく、まずは現状理解を図るための講習会を開催することにした。参加者はネットワーク会員を含む5名である（中学校、大学の家庭科教員）。

講習会の開催要項は以下のとおりである。

日程：2018年 3月28日（水）14：30～16：30

場所：岩手大学教育学部総合教育研究棟313（調理室）

タイトル：「食べることは「生きること」（みんなを元気にする「岩手型食育活動」）

講師：岩手食文化研究会代表・岩手県食育推進ネットワーク会議会長、菅原悦子氏

菅原氏によれば、岩手は豊かな食材や食文化を持つ県であるが、若い世代にとって「郷土料理」は日常食ではなく、「そもそも知らない」から「好き／嫌いを判断できない」状況にあるという。よって、学校教育の中で「郷土料理」をとりあげる際に、単なる調理実習だけで終わらず、郷土料理の文化的背景（生活文化・しきたり・儀礼）も含めて学

習する必要性が述べられた。また、東日本大震災後の沿岸地域における食に関する



行事の実施状況調査では、震災後も行事を継続した方が3割強、「震災の影響でやめた」という回答が3割で、残りの方々は「震災前からやっていない」ということで「食文化や食材を伝える担い手の育成」が急務であることが報告された。この「担い手」について、岩手県では「食の匠」認定制度があり、全国的にも事業が継続実施されている点で貴重である。参加者からは、「食の匠」との連携を取り入れた家庭科の実践について様々な意見・質問が出されたが、連携をするうえでの関係構築の在り方（「食の匠」に全面的に任せるのではなく、家庭科の教師側が具体的な指導計画を立てて依頼する、等）が課題として提起された。食文化や郷土料理について、様々な視点から再考することができ、大変有意義な講習会となった。

（文責 渡瀬典子）

4. 東京都の活動報告

東京実行委員会では、2017年度内に7回実行委員会を開催し、活動補助費を有効に活用しながら、例年の2種類の活動にプラスして1つの研究活動を実施した。

I 地域の小学生と保護者対象に放課後児童育成施設・すくすくスクール（児童館と学童クラブの機能を兼ね備えたような施設）での縫い物、編み物講座の開催

II 学習交流会の開催（2017年度は世話人会と共催）

III 江戸川区教育委員会の支援を受けてすくすくスクール（以下スクール）の指導員へ児童の放課後の生活やものづくり活動実態アンケートの実施

I では、ものづくりの面白さや楽しさを伝えていくことを目的に、江戸川区のスクールで4回活動を行った。ここでは、学校教育の中で乏しくなっている生活やものづくりの学びの実践を地域の中で実施し、保護者等にその状況と学校教育の中での学びの充実を訴えた。どの回においても、事前に教授リハーサルを行い、午後の実際の講座に備えた。また、講師陣については江戸川区として、ボランティア保険に加入していただいている。

詳細を以下に記載する。

A 2017（平成29）年度の活動報告

I 江戸川区で小学生とその保護者対象に縫い物、編み

物講座の開催

- 小学生対象の中小岩小学校すくすくスクールでの活動
○ 8月17日（木）11:00～16:30
・内容—「フェルトを使ったマスコット（かえる、くま、うさぎ、ねこから選択）」づくりの指導
・参加者—小学1年～小学6年19名、保護者8名
・当日講師—東京実行委員4名、その他1名、計5名
- 小学生対象の西小岩小学校すくすくスクールでの活動
○ 3月26日（月）11:00～16:30
・内容—編み物で「小物入れ」づくりの指導
・参加者—小学3年～小学6年 12名、保護者0名
・当日講師—東京実行委員5名、会員2名、短大助手3名、その他1名 計11名
- 小学生対象の西小岩小学校すくすくスクールでの活動
○ 8月22日（火）11:00～16:30
・内容—「フェルトを使ったマスコット（かえる、くま、うさぎ、ねこから選択）」づくりの指導
・参加者—小学3年～小学5年16名、保護者0名
・当日講師—東京実行委員4名、会員1名、短大生3名、その他1名、計9名



編み物の小物入れの製作

○ 12月27日(水) 11:00~16:30

- ・内容—編み物で「小物入れ」づくりの指導
- ・参加者—小学3年~小学5年13名、保護者0名
- ・当日講師—東京実行委員6名、短大助手2名、短大学生1名、計9名

3 以上の成果

どの回においても参加児童は、一生懸命製作をし、ものづくりの楽しさと丁寧な指導に満足していた。児童は自分の意志で参加していた。今後もまた製作していきたいとの希望を語っていた。家庭科を学習していない小学4年生以下でも興味・関心・意欲があれば、製作できるとの実感を強くした。

5. 千葉県活動報告

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、2018年3月28日(水)千葉大学にて、久保桂子先生(千葉大学教授)を講師に迎え、第5回学習交流会を開催しました。第1回よりネットワーク千葉では現場の授業に還元できるようなテーマで続けてきています。今年度のテーマは「アクティブラーニングの手法で“男性の家事・育児参加が進まない理由”を考える」です。参加者は中学校・高等学校教員8名、大学教員4名の計12名でした。

最初にアクティブラーニング手法として「家庭科におけるグループワーク型授業の進め方」についてパワーポイントを用いて、教材例をあげながら、ファシリテーターの役割やブレインストーミング・枠組み作成の方法などポイントを教示していただきました。次に男性の家事・育児への関わりの現状をデータ等で説明を受けた後、いよいよワークショップに入りました。

参加者はあらかじめピンク・青・黄などの付箋10枚と色の異なったペンが配られています。それを用いて、「1. 男性の家事・育児参加がなかなか進まない理由」「2. 男性の家事・育児参加を進めるにはどうしたらよいか」「3. 男性の家事・育児参加を進める必要がある理由・必要がない理由」の3つのテーマに対して、付箋1枚につき1つの事柄を思いつくかぎりたくさん記入します。付箋が足りなくな

II 世話人会との共催による春の学習交流会の開催

・日時—2018年3月24日(土) 13:30~16:00

・場所：東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター 2階多目的室2

・内容 講演会 「現代っ子不器用の証明」13:30~15:00
講師：谷田貝 公昭氏(NPO法人 子どもの生活科学研究会代表、目白大学名誉教授)

情報交換会 15:15~16:00

・初めての共催であったが、おおむね良好で、来年度もこの形態で実施したい。

III すくすくスクールの指導員へ児童の放課後の生活やものづくり活動実態アンケートの実施

2017年12月に71校のスクールの指導員に実施し、100%の回収率であった。この結果については現在、集計、考察中であり、2018年の日本家庭科教育学会茨城大会において発表の予定である。

B 課題

スクールでの縫い物、編み物講座については、これらの成果を今後どのように「生活やものづくりの学びネットワーク」の活動目的に組み込んで地域の方にアピールしていくかである。(文責 愛国学園短期大学 亀井佑子)

ったら足します。書き終わった人からテーマ別に3枚の模造紙に付箋を貼っていきます。ファシリテーター(進行役)のもと、貼られた付箋内容を見ながらいくつかの



ワークショップの様子

項目にまとめられないか、皆で自由に意見を述べたり、なぜそのように書いたのか説明を受けたりして、グルーピングをしていきます。大事な点はすべての付箋を活かすということです。グルーピングして項目ごとにタイトルをつけ、マジックで囲み、さらに関係性がわかるようにグループ同士を線でつないだりします。最後は出来上がったポスターをみて、意見をだしあいました。自分が思ってもみない意見や同じ考えがあったり、和やかな中、真剣なグループワークが展開されました。



参加者からは「日頃から大事なテーマだと思っており、その指導法としてブレインストーミングを用いる方法はとても有意義だったので、何らかの工夫をしながら授業で取り入れていきたい。」「とても深い内容でこんなにも意見に広がりを見せるとは思いませんでした。自分自身の中の固定概念のようなものも可視化でき、皆さんの意見も聞いて新たな発見もあり、グループワークの醍醐味を感じました。授業や校内研修（職員）にも使えると思いました。」「テーマは面白く、参加した先生方の生き方が反映されていると思った。社会体験の少ない生徒たちからはどのような感想

が出てくるのだろうか、ファシリテーターの力が試される授業になると思った。」「ファシリテーターとして教師が育つと今日のようなアクティブラーニングは生徒にとって非常にためになる授業になると思います。」「家事について学ぶのは高校生の時が最後になる生徒がほとんどだと思います。何も考えずに卒業していったら恐らく何も変わらないので何らかのインパクトを与える授業をやりたいと思いました。」などの感想があり、充実した学習交流会となりました。（文責 小谷教子）

6. 長野県の活動（学習交流会）報告

■概要

平成29（2017）年10月21日（土）13時30分～15時30分、長野県屋代南高校 1F会議室において、茅野市在住one's plus計画工房建築士事務所代表 熊谷一子先生をお招きし、ご講演とワークショップをしていただきました。参加者は県内在住の会員・非会員10名でした。小学校教諭、高校教諭、大学教員（男性1名、女性9名）でした。「ライフステージの変化に寄り添う住宅設計」と題した80分のご講演の後、約30分のワークショップを行いました。自分の好きなイメージに合わせて、住宅・インテリア雑誌より自由に切り抜き、コラージュ作りを実施し、最後に各自の作品のコンセプト等を個人発表しました。用意するものはインテリア雑誌、のり、ハサミ、台紙（画用紙八つ切り）のみでした。

■参加者の感想（抜粋）

講演の内容は心に残る言葉ばかりで、全て納得だった。切り貼りの実習はとても楽しく学校でもやってみたい。整理収納を始めていた時期なので、後押しされたタイムリーな内容で興味深かった。これから更に取り組みたい。「収納」をテーマにすると週刊誌がよく売れると聞いたことがある。それらを読んで、何度か確認してきた内容のことであり、直接話を聞くと全く違って感じることもあった。現在、学校の収納にも手を加えたいと思っ

ているところで、大変に参考になった。自分の家についても、早速見直していきたいと思う。非常に具体的な内容で、参考になった。すぐに実践できるワークも教えていただき良かった。

■成果と課題

ライフステージの変化に応じて死蔵品が変化することや動線と収納を意識した空間計画の重要性について意識や理解が深まった。快適な空間は、モノを出し入れし易く、片付け易い空間であり、モノと対話することは、自分自身の心も整理整頓することが再確認できた。家庭科の住生活の維持管理や安全で快適な空間構成に関する教材や指導事例は、食生活や衣生活に比べて多いとは言えず、家庭科教諭の悩みの一つでもある。今回は、快適な空間づくりへの生徒の関心を高めるワークを学ぶ機会になり、教師自身の実習室管理にも生かせる視点を得ることができた。

今年度の学習交流会も、長野県家庭科教育研究会の協力を得たこと、そして本会から補助金をいただいたことにより大変に有意義な研修会を実現できた。心より感謝申し上げます。

（文責 長野県 福田典子）



7. 熊本県の活動報告

2017年3月25日(土)に熊本大学教育学部本館東棟3Fの「フレンドリー生活技術室(E302)」で学習交流会を行いました。参加者は小学校2名、中学校1名、高校4名に、熊大教育学研究科の院生と修了生、熊大教育学部の宮瀬先生に私の11名。テーマは「防災・非常食」で、「さば缶ごはん」「さくら飯」「ツナ・コーン飯」「カレー味の炊き込み飯」などのご飯類、「切り干し大根の煮物」「蒸しパン」「オムレツ」「ゆで卵」などを実習しました。いずれも、地震の際、「温かい食べものを食べたい」という被災者の声にこたえて考案されたものです。

それぞれの材料を耐熱性のあるポリ袋(厚さ0.02mm以上、高密度のポリエチレン製)に詰め、袋内の空気をできるだけ抜いて上部を縛り、大鍋の湯中で加熱。ご飯類は20分中火で加熱後、火を消して湯中で10分放置し蒸らしました。オムレツは15分加熱した後取り出して出来上がり。ゆで卵は、室温放置後なら9分で食べごろとなりました。蒸しパンはポリ袋で20分加熱してもオッケーですが、紙コップに半分程度入れて、地獄蒸しにしたところ、手頃の大きさのものが出来上がりました。なお、米は無洗米を使用しました。

試食しましたが、いずれも美味。おいしかったです。今回の実習で、無洗米、飲料用水と、カセットコンロ、ポリ袋を用意しておく、結構いろいろなものが作れることがわかりました。

その後、自己紹介と、各自の防災についての実践を報告しあい、「平成21年度防災学習DVDビデオ『ふせごう-家具等の転倒防止対策-』」を視聴しました。

1年前に熊本地震を体験した私たちにとって、授業でも自分の生活でも生かせる学習でした。

(文責：桑畑美沙子)



大鍋で加熱



出来上がった蒸しパン



オムレツ



切り干し大根の煮物



いろいろな炊き込み飯

世話人会からのお知らせ

1. 会費納入をお願いします。

2018年度の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。お忘れなく納入をお願いいたします。

2. メールアドレス未登録の方は、登録をお願いします。

メーリングリストによって会員同士の情報交換を行っております。多くの皆様にメーリングリストへの登録をして頂き、活発な活動を支援したいと考えています。なお、異動の少ない個人登録のメールアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。

3. 送付先住所やメールアドレスに変更があった方は速やかに連絡ください。

勤務先異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になったり、メールアドレスが変わった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所をお願いします。

事務局メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp

2018年度実行委員会のお知らせ

★以下の通り実行委員会を開催いたします。ご参集くださいますようお願いいたします。

日時：2018年9月23日(日) 11:30~12:30

場所：キャンパス・イノベーションセンター5階509A・B

議題

- | | |
|------------------------|--------|
| 1.各県の学習交流会実施報告ならびに実施計画 | 2.意見交換 |
| 3.学習交流会開催助成金の支給について | 4.その他 |



第9回総会とシンポジウムのお知らせ

日時 2018年9月23日(日) 13:00~16:00

時程 13:00~15:10 シンポジウム

15:20~16:00 総会

場所 キャンパス・イノベーションセンター東京 1階 国際会議室

所在地：〒108-0023 東京都港区芝浦 3-3-6 (JR 山手線田町駅徒歩1分)

シンポジウム

新学習指導要領とこれからの高校「家庭」の展開

趣 旨

2018年3月末に高等学校学習指導要領が改訂され、今後約10年の高校教育の方向性や内容が提示された。これまでの高校「家庭」の変遷も踏まえ、新学習指導要領を多角的に読み解き、現在の社会状況において家庭科の果たす役割や課題、今後の方向性や取り組みなどについて、各シンポジストに自由に論じてもらう。中学校との関連や大学の教員養成等も視野に入れ、「生活やものづくりの学び」を充実させるための課題や展望とも関わらせながら、活発な意見交流の場としたい。

シンポジスト

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 小高さほみ氏 | (上越教育大学教授、家庭科教育学・教師教育) |
| 石井克枝氏 | (淑徳大学教授、調理学・食教育) |
| 久保桂子氏 | (千葉大学教授、生活経営学) |
| 中川千文氏 | (元静岡県高校家庭科教諭、家庭科教育研究者
連盟理事) |

コーディネーター

- | | |
|-------|---------------------------|
| 志村結美氏 | (山梨大学教授、家庭科教育学、ネットワーク世話人) |
|-------|---------------------------|

生活やものづくりの学びネットワーク事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 4-39-11 仲町 YTビル 3F 日本家庭科教育学会事務局気付

Email: seikatsu_nt@yahoo.co.jp

HP: http://www.geocities.jp/seikatsu.monozukuri_nt/